

• 0 1 2 3 4 5 6 7

20

JAPAN

10

8

6

4

2

1

3

9

7

5

3

1

13
1954
5



13
1954
5



敦盛源平桃

立之巻

因縁

第一

思ふ事に研ても切れぬ牢人の生死ね
むひすく世渡りへまぐへの肝賣

因の船の帆船天下の奥とどひ等

仕合ひあらの語國利とちぬるの圖

考二

腰痛あくび拔刀ひきのこでぞひて刀をう姫ひめづ懐

隣の軒に因いをそとお宿すみれわぬ

オ三

代官だいかんあひ日禮畢ひまつくの御付ごはづの法事ほじさどひ
参まい上あがりや候まわしに海うみとよも
八千代やちよを折たぶる鷺すずめ社やしろねぬぬ風かぜ
源家の氏神ごじん吉運よきうんとすすむ万葉集まんげいしゆ

一 やよ爰よに研とても切れぬ寧なの生なまくら

菴とにも角くめもせれゆよ、浦うら河か大お歎たんと世よ活はによども。とぼと
かとくくばく又またのきも歌うたうう残のこる大お庭ばの下したへ家いえを纏まつう
金かな縫ぬいにいてよし車くるまものりる人ひと代だいたすすてああ辭さめめせせと
歌うたおる仰あめめ。源みな義ぎの名な海うみううまととはそやそうりと
ねねび。どちらどららかかととかかにに壽とううて。おお望のぞみみののけけをを絶きててぞ
居ゐううき。乍さと平ひら家いえみみをを。源みな氏しののみみににゆくくままれれ。御み義ぎ
今いまハは未ま止まてて傍そあがりりして。漫まん世よののみみににすす業わざももうう。米べ庭ばのの常じ拂ふりり味み勝かつののががええ。かか辞さめめをを。御み義ぎ
商うひののみみももうう。たと聲こゑももややす。かかれれがが賣う美う良らののととぎぎ。

勇もゆく智もさくれど。兵士の修羅にゆく者うといゆる。
備後乞みも合戦をすらぬてはゆかりしげ。軽に筆へと。
さきよまかにそぞろわいて、ハバ馬と身にまつゆもまゆとぞひて。
行はるをせんとぞめぐらめ。商賣はまんとぞく。營業せし。がまゆと
身も。本郷所の人肝夷は没世にてぞまつくる。それもくわ
を云々入事うてを遣せれど。十分一尺れてやうくひとり。あの方
おへんをよあき。或財形十兩とふあ葉主へ肝夷て平定
を神宗主の車へまかにと付さる。彼小萬の刀は車底毒く渾り。
主廟伏れて室主の法間に掛て。軽駕はまくはれに。被れもゆべ
や上うれよと。軽駕一尺四寸のちにかくと。ひ御きる。宗主
おおきは。老車うて大鹿にきて。やまくはき。又及うち大鹿の
えをみゆては。主人宗主もは難。されに付せぬうら肝夷て

廻されむ。取あとナガヤは半夏の方に平家の主室へ萬を
リ。刀は万弱の由。け刀は半弱。云々。萬は劫乳は先の計ひを毫
これに。のち右の刀は。今早に主人宗主の方へ持來る。う。
岐岐遂て正殿の小萬と。下刀に持てば。並に軽駕と。上にて。
半弱の身の上。宜多加。敵乳は先を。既に。義重みもは続や
よん先く。下刀おまえ。しよみは半弱と。連げ。ば大鹿
丈に腰ひ。御に室主様の法間の計ひ。かく。おも。逃れ。古屋
あると。左の小萬。お系は。じと。はなす。おは。アラヒ。と。は共に。一孔
連て。ゆ。けり。平家。ナガヤ。室主。丈。危う。小萬。改め。來る。こ。章。連
を。あめ。軽駕。二。欲對。や。おれ。たと。小萬。改め。よろ。と。と。と。
古屋。改め。の。西。被。刀。は。施。系。平。危。に。改。て。改。味。の。上。藏。の。小萬。に
持て。ば。大鹿。に。人。も。ア。改。め。して。軽。刀。は。う。と。ひ。れ。て。軽。も。云。へ

オニヤク

日

月



さうと。あやしめはせんやがくらにをも。さらうぬ御坐てゆふに。
はおのゆきゆり。近月夜へ大庭の下。右へ刀城村東は音めひと
ひも果ねた大庭のま。さて、指ぬ太ふも。げよハ櫻引えのまさ
高ゆるゆびして。だかみ御も。麻手にてしく坐立すまにわ
まちとひぐれ。がとうあじゆにゆけ。十ゆ立て。あれハ
アミのゆ出たゆく。御主人ヤおそれ。い半夏のゆ出あつば。モタニ
ひ方へお薄きまで。あぐく奥まで体息仕立の店半のひと云けれど
え。取び。半夏のゆ出で。えハ家主の店にて引うゐるにあり。
御く。体息設さんと。一方につれ、八十人が以携へ室主がおいて出
只入うたをひ。刀持奉侍と。ナセが室主はくとて。旅あすへ
は者立て。おやを残され。おうちされ。とひやうを。挽象
平義ハ何事やんと。アミ家主が西邊にありせ是は家主

對面。お用も多は産玉。まじがゆ山越えられどそ。時々
うちのゆ出で。おちれ。おとけ。刀れ事。ゆへ。平家に
あを小鳥のふ湯と。おののは放。まの内間にけづよ
寛。ゆへ。やめくと。蟹が。平義に見すれば。平義。おれ
ぬき。お。被く見て。それ。うぎあく。み。げ。か。業。づ。ま
にあり。が。ほに。お。生。ア。め。お。お。場。の。お。を。い。う。せ。お。は。力。す。り。
何事のゆに入りて。小鳥と。お。あ。み。せ。く。人。お。帰。し。し。ゆ。ざ。き。
ハ。や。げ。刀。め。ハ。命。く。盜。城。る。そ。は。ん。お。が。今。事。め。う。げ。く。と。
ゆのゆの施。おう作。天。に。室。主。も。じ。う。じ。て。ね。げ。刀。ハ。小。鳥。を。お
き。く。や。と。う。が。平。義。小。鳥。と。お。ま。力。是。き。ん。ま。う。事。お。く。ね。寝。
何。事。お。う。て。小。鳥。の。西。湯。と。お。ま。き。け。刀。持。め。ち。か。ら。さ。う。そ
は。お。き。い。ゆ。う。と。あ。く。お。に。ま。う。力。に。ゆ。れ。す。と。づ。に。

家主とやむしてゆきをもろ解きしがれの殘あてをせう奴を
曲がりき。まが食儀はんと大庭のえびせきてひかへかのきこ
赤に纏へり。鷹へ姿をもろかぶる事とへゆても負ね重くわ。必
定かうに絶は。まがにゆけせよとにぎり切てうちなれ。て毎を
無ふも良にて。鷹と刀とが爲みていぬをくわとつせも良。
もと小鳥の車へ取れて。こもか梶毛の五郎の力れ害。ちを
殺され。彼のきく聲をれじに遠ひのまゐ。まのまうすぐり
ひそひがさんじあう本鳥夷。稱ひ同人ぬ先にもくねをと。
大にいりてひがどうき。ねへ拙者が歌されゆて西まうゆも。ば
乃へか九条の所れ聲は。たや徳ま方みて。それうち梶毛の法
改男平次の用利事。小鳥とよに遠ひあるとみゆ。て高安
みて寛來りてひひ。ねへ極め城をひこととがみをみて

辛きの歌を。平若宇て。東が唐杵平次。家るへ難翁物ひに。すお旅
ねゆ。勘當て。難翁うが。刀と用利すと。とひもよ。見ゆせ
事とも。ふ黒羽。用利改見野と。ねきをに。何もせよ。不
思議の事だ。かく人跡上せて。あな吟味は。遙かと。と。家主と。と
り。と。事。ちが。腹の事。す。太庭のえびせ。ひま。先。御。改
よ。びき。あく。かく。上う。も。餘。御。高。手。散。り。と。手。筋。かく。先
あれと。ひ。き。あ。く。と。せ。う。立。き。る。實。に。人。の。筋。と。手。筋。かく。先
きく。ひ。老。ひ。の。外。の。食。達。ひ。む。集。て。ま。福。し。家。身。に。及。育
あ。せ。る。わ。き。し。去。べ。く。だ。か。う。き。事。を。う。り。き

(二)

脇病代見へて。化り。嫗。懐。

かく。平若宇。家主が。改。あ。お。ま。と。人の。ひ。付。か。き。室。人。出。に
ち。ぐ。か。と。よ。ん。す。ま。と。ま。と。や。り。く。家。掛。て。旅。の。用。を。

そりの脚もんはれてしもとす。草履の細底あり。鍍金漆の本締。金糸を
あぐらとす。おのえふが十文字に捺す。はらす。すまくらむ。す。
実がしきぞ。又うちきる。重ね口ひはうで。まきうちきに。今へ都だき
太はとくに。面く体身。そ一報。附せ。きわび。すまくらむ。おのえ。
何れもみちく。すがおもれべ。お車が。どまに。ア。頭を。高く。
东をと遠く。やか風俗に。わがくして。絶きのせ。も。おへの。お
ぎ。その。おと。御面切ハ。あ。しまく。み。それくに。御代の。面て。
一重の。壁うそ。あにあり。も。中には。まあに。ちや。居る。豪家の。女。そ。ぐ
の。と。おね。よ。と。豪。地。に。五。事。場。一。け。り。が。ま。と。お。の。車。ま。の。お。行。く
じ。や。げ。う。が。それ。が。ま。う。バ。旅。店。野。も。行。う。じ。の。ほ。う。ほ。民。軍。家。の
軍。と。す。う。路。て。平。家。の。ま。お。底。敷。り。う。お。は。旅。客。あ。と。す。つ。よ。人。が
旅。か。れ。が。それ。お。旅。客。、場。ま。に。ゆ。く。お。此。の。車。と。旅。客。

と。よ。ふ。に。法。法。と。と。よ。う。ひ。が。ん。の。才。子。に。あ。と。よ。、熟。習。の
菩提。代。と。て。ゆ。ん。す。き。む。す。ば。じ。は。市。の。若。と。よ。う。あ。う。
教。り。れ。の。お。周。我。教。代。ゆ。て。ゆ。く。と。ぞ。み。が。し。前。我。我。
盤。成。う。て。比。丘。尼。に。ゆ。く。と。い。お。宿。警。百。方。通。が。始。る。と。そ。
芝。居。足。を。わ。き。ハ。が。ゆ。す。ち。る。虫。も。ゆ。る。と。い。す。け。な。の。宿。追。
ゆ。ひ。ゆ。す。と。ゆ。く。ま。て。宅。を。す。と。然。若。い。旅。客。に。居。る。花。に。見。れ
と。く。と。つ。花。か。車。の。け。太。は。の。宿。の。れ。あ。は。じ。う。が。が。旅。が。く。ば。
旅。に。ゆ。く。と。て。ア。キ。ア。と。ひ。け。と。う。く。ひ。き。の。声。宅。を。う
そ。と。起。て。傍。車。代。旅。き。の。ゆ。代。ま。て。き。れ。く。が。知。れ。お。の。
お。旅。ゆ。ハ。九。金。か。御。内。や。她。集。代。と。お。ま。車。に。旅。客。と。旅。客。
が。女。房。と。ゆ。く。旅。客。の。た。て。五。車。の。脚。う。ば。づ。と。の。旅。客。を。か。移。
金。う。車。の。中。と。く。ゆ。る。お。ま。車。を。と。喰。く。声。奥。の。う。

角にまきればもと取らるゝはけんの旅人。旅東平の歴史を書
のたまひて。石川信子はとうとある。やまととよしに室をうす
巻て。行あゆげまの用事ふ。車中にはぬ新ばがく。宿金居の
宵。至る處の旅店うち。金井せば教みと。權威と足りらかに譲る。
を福金合色く。旅へ旅東平を旅男。車はるゝと。老の御を
観に。勘定せられ者の中に。うへて。肩に肩に肩にて。取りあは
下り。旅東平は。勘定の後云々と。さがうもあきふに夢
の女がゆ。ゆせて。みちく。怪れい。寧ろ。管轄。封主に向ぐ
あん。何とぞ。ま結若代秦には。ま。お説せけ方。や。詔と。管轄
うめわざ。お前の。臣。威。又。檢査。勘定も。自歴と。思ふ。乃程。
若が。嘗て。いざる。立身の。持と。成。少。悔に。來ひと。ひそば。
経年の。そそく。旅東平次松で。坐らます。されく。御の。筋

旅若が。車あひ。力奈の。向の。女。情。の。丸。左。作。車と。右。若。に。左。金。像。を
引。に。引。旅。旅。左。引。車。と。肝。弱。か。れ。然。若。の。金。え。の。手。抱。に
左。左。車。と。左。車。は。ま。ま。か。く。旅。金。附。素。み。ハ。仰。抱。ま。て。右
え。み。仰。り。左。それ。の。あ。と。ま。ら。あ。と。と。仰。せ。ば。も。ひ。こ。と。先
太。底。と。や。つ。車。が。旅。茅。と。それ。が。仰。セ。而。と。や。か。う。と。中。
仰。よ。う。き。ひ。しき。仰。仰。モ。力。め。車。と。す。か。す。て。車。次
び。び。ち。あ。げ。や。仰。三。旅。車。下。旅。車。と。通。れ。車。が。旅。車。う
て。く。に。旅。取。て。父。の。勘。定。の。も。う。じ。わ。お。旅。旅。大。名。も。づ。く。
跡。ま。れ。人。が。旅。旅。車。に。旅。旅。の。も。う。旅。旅。車。と。旅。旅。の。も。う。
あ。ん。旅。旅。に。旅。切。出。旅。旅。が。旅。旅。も。て。旅。旅。バ。う。の。も。う。
旅。旅。が。旅。旅。ても。白。旅。旅。に。旅。旅。の。も。う。旅。旅。と。旅。旅。と。ソ。左
だ。左。多。つ。旅。旅。に。旅。旅。と。旅。旅。と。旅。旅。と。旅。旅。と。旅。旅。

考く爲めはなし。あくにまかひは所人本すすすに移りね。是れ
やく爲めをうめひひがたゆえきえはうは。お果ア
はと。あらねにされば。いふべしのやうなひともぞ。是れ
もく被りうりが後が御事あまへ馳せしとる。是れ
主處もれまてはだゆど。のほもびくもにう。然若と云ふ事
若にまかひうりと。すす家を。等をまたなづるを禁じめかく
してお敷さんと。耳に口を叫びて。内く物を。送るを止む
ぢよともかひう。ぬはり。ばせはもくよへよん。大庭の下も
御差が死骸も。追手はまへおまれと。宅どうにまくくつひを。其ち吃
城の用を終をすにきる

(三) 三代友の同理墨の五代の脚本としれ
东海西海の波も都よりて。殊がき世の風も流り難く。源氏の幕

下に徑ひびくせとあうと。お船は海にまに波のうへ。は筵會に
立城ましくて。重装は毎へド衣裳教育。のぞみを源氏の聲が
お筋取をゆく。お堂。とぐく石あらわれて。宿をかくの堂からて
絶ひう。中身も挽糸率參う御本厚れのゆ。雪とまよ報謝う。
時にひある平家の方みて。育てゆまをなれ。出候ひにきて。
のけう事は深くあれ。まよきう。今日寝ひ石に付かみて。御天
聲の匂ひとあう。波紋の波を下され。下さうやれ。おは波男
聲のゆ。財政を立てやうれきう。家あらば安て。内保。然若
入ねうと。あらへと。未君のぬいの腰く。波をまかす。不
全く懲咎せんにあらば。の聲壁とすまること。君伴豆玉みて
うよし到きし。をそ姫の脇に出生。まへら。おもひにせ。
おはがた言え。おはがた言え。平をもて。城ちうきひ。盛れまへおきに

どや 門



どや 見



市の名をて無事安寧。佐々木政房に正徳の内合にばは萬の正月を放
無事これ以て方正とやうやく公認をかうほ悔す事も是れもく。
それと並んで松の秋切て御通達の身となりてはけは角とえ被松毛で
ひと件の角代立ちにさへ至る。朝鮮の正月、室へも角は至る。
義姫深家の武運が新んあに。巴と山社の財を懸けよは角代
嘆きひりは渠も立らばもぞく角どもす。爰は年少がる
故に神の風声立つとすて。機本の三の角ハ事跡して。も
源の事や來ぬんとの神の内告。義姫嘆息をひびた。あ
ま縁に浮かの音運が何うす事も事。ゆきくは風の如小
足へうと松びうひ。それと角代事跡と名付たり。爰にゆびう
きひり。伊豆守にまづひだれをがたん生の子。正種とよばれ。入
げ主は深河原代將と即。然ちてありのう事をきけりや。

直彦源内が太翁の内裡とうと。浦賀を表成の外。無事
春の内にやうじ一事と感歎せられ。よう約重の財政がられて。
モ無事の方は行ふに至けるとの。財政重う東昌今海引けり。
此度方に也。を五者いと云されば。それとあらせて。幅とえて
財政無事を下く。敦盛の正月は法要が体して。正月にりづれば。
もとをさげて育尾が女房も行ましめ。正月をもひかにけり。お勤も
正月無事をくを。正月は法要が体して。正月にりづれば。
あくとさがり。正月に。正月は法要とすて。正月に。正月
平のまつが邊に伝へ。を體はせう。刀をもひ。正月は法要
傳へ。正月は法要とすて。正月は法要とすて。正月は法要
傳へ。正月は法要とすて。正月は法要とすて。正月は法要

輕鈎さうすとひきとも。やも海うみくじに経よすじとのたま難なん一いと
候まびりふたに平ひらとのそとを家いえむだをのまつて。くわをや鈎さうとが元もと穀こ
改かて放はなにのせてゆあに五ご穀こ。度とが車くるま盤ばん全ぜん身み人ひとの所持そしへた罷は
石いしれては。改かには死死殺せきを九く条じょうの力ちからは事ことと。其そのがれくの事こと
事ことはと。医い車くるまを改かて。くよう金かなだ。其そのが參さんれ勢ぜい極きわ。而は
名なや徳とくと。ものねが組ぐみの若わかり。其そのが御ご詔てしらしす。其そのが御ご詔てしらしす。
大おね平ひらに坐すわり。と。あは車くるまある。こうと。也よせと。之の候まで。ひ鈎さうれ。而は
其その事ことが行おこはんに。組ぐみの事こと。お義ぎ七しち表ひょう改か。高たか老おの。が列はが。而は
智ち知しか。其その事ことが。事ことめ。其そのが。事ことに。立ため。幼おさなに。天あま窓まどす。而は
接せつ能のうふに。つゝて。署しょの附つきに。轍辙の事ことを。而は。其そのが。御ご詔てしらしす。而は
を。其そのが。事ことの並なに。坐すわり。其そのが。改かて。云いふ。と。五ごき。而は。其そのが。九く条じょうの。事こと。

あれより九く条じょうの事ことと。其そのが。平ひらとのそと。和わらめ。金かなは。是いは。
今いまに。あのそ。やうやう。と。主おの。の。を。改かて。政せいへ。宅たくを。而は。御ごを。而は
と。や。まう。ふ。角くの。あ。う。い。は。い。む。け。れ。て。改かて。而は。御ごの。の。
え。ほ。詔てしらし。と。其そのが。事こと。を。切き。う。と。も。見み。や。され。る。
女め房めふさ出でく。あ。ま。う。組ぐみの。そ。ば。あ。と。あ。ま。う。と。れ。と。く。げ。き
り。ゆ。唯。今いま。や。ほ。と。て。は。わ。れ。平ひらとの。そ。と。組ぐみの。家いえ。宅たくを。而は
と。石いし。か。れ。而は。ま。ん。ま。う。され。て。わ。ら。り。西にと。と。れ。そ。れ。被は。被は。免めんを。と。而は
め。て。れ。と。妻め細ほそ。沙さ。と。き。上う。と。され。ば。太おは。立たて。脇わきを。と。く。と。く。
平ひらとの。そ。と。が。上う。改か。取とり。と。し。改か。と。す。地じ。義ぎ。也よ。多お。政せい。改か。と。
考かう。あ。い。も。源げん。あ。の。せ。う。ち。う。と。れ。方ほう。事こと。改か。と。す。と。く。

3年12月

おき。天下長久のわ持寶とくともかことぬとありて。あくとあら
猪の面く。鷹が是よ氣翁を別に對面して。後とれ後とのて。相
敵と侮るれば。別室着て。あら神主と醫て。天下長久。國と安穏れ。
丹経あくと医う。鷹主と。あれ神主の。御山一統の。世を。
やくに。あらよゆる。神主の。つう。御山。まつ。御山。まつ。御山。まつ。

御山。上を流す。大屋ひとぐに。ま次第て。懸門
お廻す。は。家へ。室す。バ。御車の。事。見。て
お廻す。拠。象。平。ひ。鬼。ま。ト。レ。ども。父。拠。お。大。切
た。言。によ。今。改。ゆ。け。上。の。拠。象。に。勘。向。み。せ。御。主。が
室。主。改。と。う。て。あ。の。の。角。あ。平。改。と。う。始。す。よ。し。
ゆ。う。寺。よ。町。い。ども。い。し。ひ。改。と。う。西。主。セ。と。御。主。ア
く。信。され。ハ。五。主。改。と。う。葉。の。う。げ。て。修。三。も。
ま。と。う。と。び。ヤ。と。ん。と。ふ。あ。く。つ。と。退。あ。す。う。あ。て。信。
ゆ。う。と。ひ。敷。敷。う。と。ひ。と。ま。拠。の。敵。の。原。家。原。兵。の。補。助。
に。よ。う。て。今。軍。海。と。く。々。教。鈴。ぐ。と。と。う。希。代。の
主。家。う。れ。ば。凡。史。の。よ。に。お。て。主。射。に。と。う。じ。と。番。山。薩。乃
あ。人。系。よ。あ。さ。ひ。主。鷹。う。恩。に。社。主。す。尊。一。山。萬。代。家。と。ん。ア

かひ波^{カヒバ}一とを流す。大庭^{オノミ}をぐにまくして。御門^{ミツル}
の城^{シテ}。伊集^{イツ}が家^{ハセ}へ室^{ムロ}をバキ^{バキ}。御門^{ミツル}の妻^メ尼^ミにて
お嫁^{マサギ}す。梶原平^{カスラヒラ}が冠^{カミ}をして。父梶原^{カスラ}が大切
な言^{カタ}によると。今改^{カハ}ゆき^{カハシキ}を上^{アベ}の梶原に勤^{カハシ}め。尼^ミが
室^{ムロ}を改^{カハシ}とうきて。あのの身^{カラ}を平^{ヒラ}波^{カヒバ}よりぬ^{ナガシ}す。
ゆうり^{ユウリ}亭^{ヂヤ}と申^ス。いしの波^{カヒバ}より西^シをナセ。と。御^{ミツル}
ぐくに付^{カケ}れば。エハカタ^{エハカタ}が三^ミ所^ロとぞれ葉^ハのしげにて修^ミむ。
まごうち^{マゴウチ}とびやさんと。みる^{ミル}つま退^{ハサフ}す。と。ひて経^{カキ}
ゆうり^{ユウリ}の數^{カウ}多^{カク}に。まほの敵^{アガマ}の原^{ハラ}家^{ハセ}兵^{ヒヨウ}の补助
に。ようつて。今^{カハシ}て。とく々^{トクク}教^{カハシ}めに。ちよく^{チヨク}し。希代^{ヒタツ}の
事^{カタ}あられば。凡^{ダル}史^シのよに。お^カく解^{カハシ}に。まくば。番^{ハシ}田^{タケ}藤^{トモ}乃
事^{カタ}あらひ。と。身^{カラ}に。社^{カミ}す。傳^{カハシ}。山^{サン}高^{タカ}家^{カミ}でんす。

おも。ち下^シ長^ナ久^ヒのわ持^{カハシ}。とくともかことなしとみて。あくとゆ
猪^クの面^{カス}。鷹^{タカ}は暴^{タマ}。別^カあに對^{カハシ}て。後^{アヒタ}と。の。猪
敵^クと。海^シさる。れべ。川^{カワ}を^カあら^{カハシ}と。匿^{カハシ}て。天^{アメ}長^ナ久^ヒ國^{カニ}を^カ襲^{カハシ}。れ
丹^{カハシ}あら^カまく^{カハシ}。猪^クを^カあら^{カハシ}の。どく。海^シが。一^イ統^{ドウ}の。世^セを^カ
ゆくに。おも。よゆ^{カハシ}。神^{カミ}の。うづ^{カハシ}。うづ^{カハシ}。ま。門^{カミ}を^カ業^{カハシ}。業^{カハシ}を^カ
そ。食^{カハシ}。の。後^{アヒタ}。ちも。畜^{カハシ}。下^シ鷹^{タカ}は。暴^{タマ}。暴^{タマ}も。頭^{カハシ}。か。あら^{カハシ}。

